

第16話 源氏の北国進出

信濃よしなかに起こった義仲はちくが破竹いきおの勢いを以って北陸道を打ち従える。
俱利伽羅谷くりからたにの戦い、平家の致命的な敗北ちめいてき はいぼく。

義仲よしなかの勢いが北国ふに振るう

信濃しなのに起こった源義仲みなもとの よしなかが、その後、上野こうづけの一部をも打ち従えて、その勢いがますます盛んになったことは前にも述べた。平家はこれを聞くと大いにあわてて、遥かに越後はるの城じょうの資永すけながに命じてこれを討たせた。義仲よしなかもそれを事ともせず、治承5年6月、資永すけながが40,000余騎を率いて信濃しなのに入ると、僅かわづに2,000騎の小勢を以って、千曲河原ちくまかわらで戦って大いにこれを破り、進んで越後えちごに入った。

彼の勢いはその後、いよいよ破竹はちくの如くでした。治承5年7月14日に改元して養和元年となったが、その元年の秋の頃には、越後えちごから越中えちゅう、能登のと、加賀かが、越前えちぜんの国々まで、悉くことごと義仲よしなかの勢いに靡いて、北陸道なびは今が全く源氏の支配しはいに帰した。

こうして越前の国まで源氏の勢力が及んだことは、更に大いに平家を驚かせた。北からも京都おびやが脅かされることになったからです。宗盛むねもりはこれを禦ぐために、従弟の道盛みちもり、教経のりつねらを大将として、越前の国むかに向わせたが、彼らは義仲よしなかの軍の盛んなのに圧倒されて、合戦らしい合戦もせず、あわてて京都に帰って来ました。

その年も暮れて養和2年となり、その5月27日に改元して寿永じゅえいとなった。この前年の秋から国中一般さくもつ ふさくに作物が不作で、思うようには兵糧ひょうろうを集めることができなかつたので、勢い義仲よしなかも前には進みかねて、越後の国府なおえつ - 今の直江津やしなの附近 - でしづかに兵を養っていた。

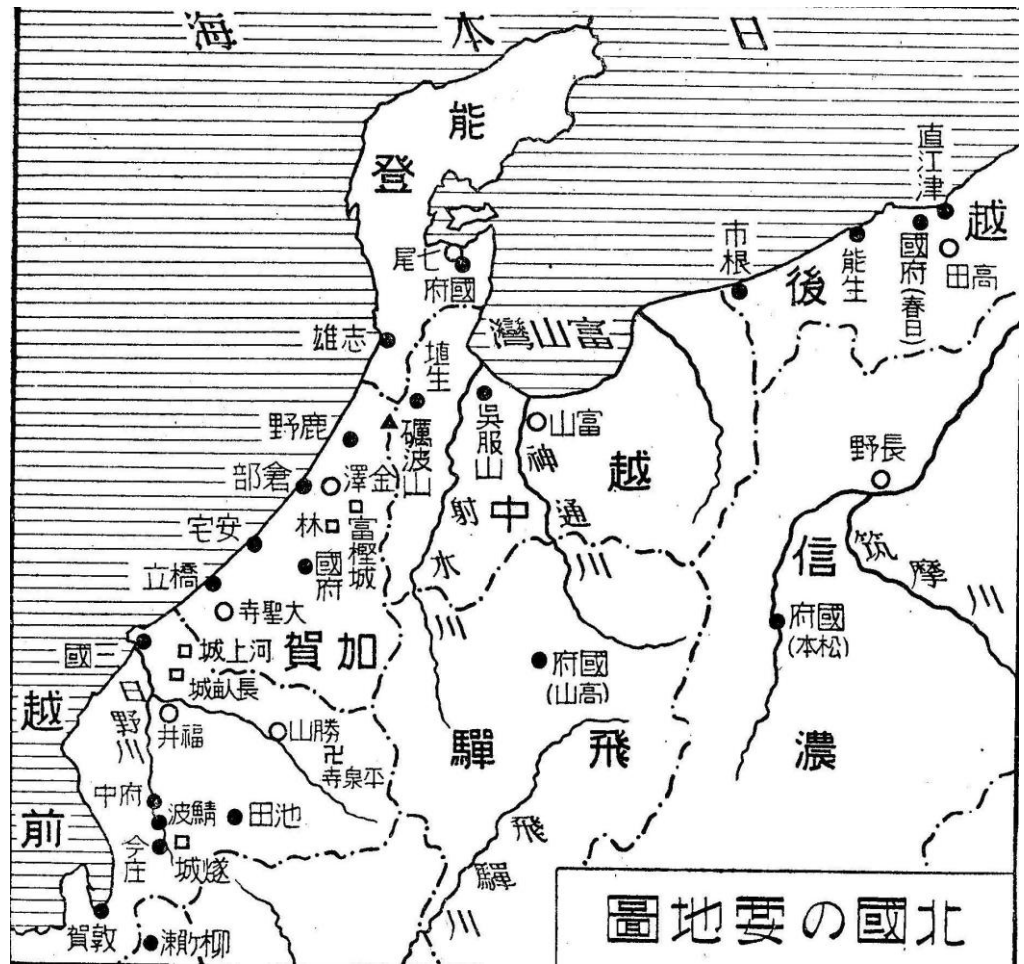
平家ほっこくしんぱつの北国進発

その間に、平家はその勢力せいりよくを張っている機内はから山陰きない、山陽さんいん、西海さんよう、南海さいかいの諸道なんかいに令を下して頻りに兵しきを募つっていたが、寿永2年の春の頃には、これらの兵が陸続りくぞくと京都に集まって来た。

その総勢は 100,000 余騎にのぼったので、乃ち平維盛を総大将とし、道盛、忠度以下の一門、凡そ武勇に携わるほどの者は殆ど悉く数を尽して北国に進発させた。まづ、義仲を討つて後に、東国に攻め入って頼朝を討とうというのでありました。

燧ヶ城の合戦

義仲は越後の国府でこれを聞くと、急いで部下の一部を越前の燧ヶ



城へと向寄せた。ここは越前の国の南端に近く、北陸道一の要害といわれた城で、ただでさえ容易には攻め寄せることが出来ないのに、谷合の川を堰止め、城の周囲に漫々と水を満たして、さながら湖のようにしていたので、船がなくては渡しようがない。

立て籠もった源氏の兵は僅かに 6,000 余騎に過ぎないのに、平家は 100,000 余騎の大軍を以ってこれに向いながら、前方の山から空しくこれを眺めて日を暮らすばかりでした。

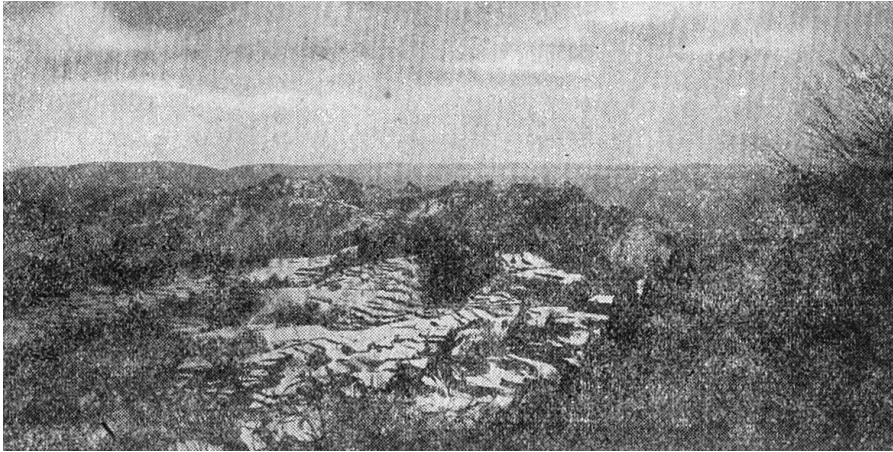
この時、この城の中に一緒に籠っていた平泉寺の長吏齊明という者がいた。彼は、平家の軍の勢いの盛んなのを見て、俄かに変心して、ある日、平家の陣に矢文を送って、堰き止めた水を切り落として攻めよさせた上に、自分は 1,000 余騎の僧兵を率いて源氏の背後から大いに矢を射て平家に応じた。そのため、源氏もついに支えかねて、燧ヶ城は陥落した。

源氏は次々に陣を張っては敵を防ぎながら、加賀の国に退く。平家は齊明を先に立てて、犇々とその跡を追って、源氏の城を次々と焼き払う。この雲霞の如き大軍には、何者を以つても迎も対抗することなどは出来そうにもなかった。

義仲は早馬の使いでこれを知ると、驚いて、直ぐに今井四郎兼平に 6,000 余騎を率いて先発させた。平家の先陣は既に加賀と越中との境に礪波山を越えて越中に入っていたが、兼平は一戦でこれを追い払った。

しかし平家は、源氏の先陣の小勢なのを知ると、今の間にこれを撃ち破って、早く越中に入るがよいと、乃ち 100,000 余騎を 2 手に分けて、二つの道から進むことにした。本軍の 70,000 余騎は維盛が自

らこれを率いて加賀と越中との境の蠣波山に向かい、別軍の30,000余騎は道盛みちもりがこれを率いて、能登、加賀、
越中えっちゅうの3ヶ国の境である志雄山しおのやまへと向った。



福井と富山の境 倶利伽羅峠くりから

義仲よしなかは兼平かねひらの後から夜を日に
ついで越中に馳せ上っていたが、途
中でこれを聞くと、敵が越中の平野
に出ない先に蠣波山となみでこれを撃ち
破ろうと、一層道いそを急いだ。

蠣波山の対陣となみ

寿永2年5月11日、義仲よしなかは蠣波山となみ
の北ふもとの麓ふもとに着いて陣を張る。

その勢せい50,000余騎を7手に分けて、その内の10,000騎をば、その頃彼の陣中に在った叔父の源
行家ゆきいえに授けて志雄山の敵に向わせ、5手は今井兼平いまいかねひら、樋口兼光ひぐちかねみつ、根井小弥太ねいのこやたらの諸将に授けて、蠣波山
の裏手や横手の間道から敵のうしろに回らせた。自分は30,000余騎を率いて正面から敵の下り口に陣を
張った。

平家は既に峠を越えて、坂を下りに東に向いながら、遥かに麓を見渡すと、源氏の白旗が4,5流も
風に靡なびいて立っている。源氏が押し寄せたことの早いには驚いたが、この山は四方共に切り立ったよ
うな岩石であり、能登路の志雄山は既に固めている。西は身方ばかりであり、東は一方口で、高く、険し
くして道が狭いので、敵も容易には攻上ることは出来なからうと、安心して、峠の上から少し下ったあた
りに陣を張っていた。

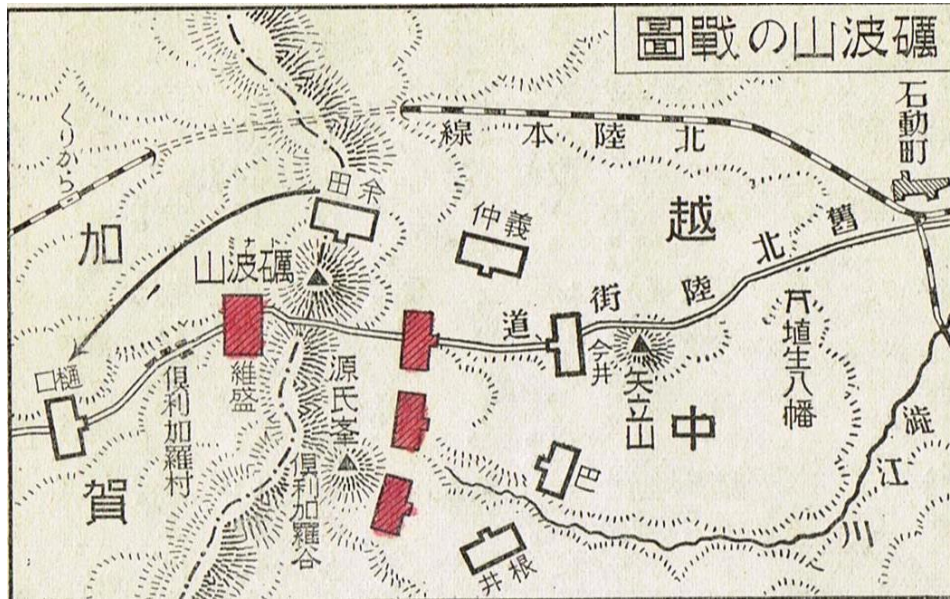
両軍の陣の間は、僅かに5,6町(約600m)にも過ぎなかったが、互いに楯を突き並べて、矢軍すら
もはかばかしくはしようせず、ただ睨みあっていた。源氏が軍を急がなかったから、平家の方でも
進んで戦うことはせずにいたのです。ところが、実はこれは源氏の計略だった。日が暮れ、夜になっ
て、間道から敵の後ろに回わした身方の合図を待って、前後から一時に押し寄せて、平家を峠から南に続
いた倶利伽羅の谷に攻め落とそうとしていたのです。平家は、そんな事は知らないで、のんきに源氏
の相手をして、空しく時間を過ごしていました。

日が暮れて、夜になった。11月の月はおぼろに照らしていたが、樹のよく茂った山の中の細道です
から、源平共に、互いに見分けがつかない。平家は、夜討があるかも知れないから、寝てしまっ
けないぞと、互いに励まし合っていたが、はるばると遠い所を来て疲れていたから、鎧の袖を敷いたり、
胃の鉢を枕にしたりして、ついうとうとと眠っていました。

これに反して、源氏の方では皆それぞれに用意をしていた。樋口兼光ひぐちかねみつは敵のうしろにまわったのだ
が、3,000余騎の中に、太鼓や法螺の貝を千ばかりも持っていた。義仲よしなかは正面から進むのだが、牛を4-
500頭も取り集めて、角に松明を結びつけて、夜の更けるのを待っていた。

くりから
俱利伽羅谷の戦い

さて、樋口兼光の軍を始め、間道を進んだ5手の軍は、完全に敵のうしろにまわると、合わせて一万余騎の軍勢が、一時にどっと関を作って、太鼓を打ち、法螺を吹き、呻りを発する 鏑 矢を射上げながら、谷々山々を打ち轟かせて攻上る。山彦がそれに答えて、幾千万の軍勢とも分らないほどだった。



よしなか
義仲はこれを聞くと、「それ、搦手はまわったぞ、関を合わせよ」とて、4 - 500頭の牛の角の松明に火を付けて、牛を平家の陣へ追入れながら、30,000余騎の軍勢に一時にどっと関を挙げさせた。

前後 40,000余騎の関の聲は、山も崩れ、岩も摧けるかと思えばかりでした。

この不意打ちに、平家の軍がいかにうろたえたかは容易に想像されるでしょう。折角うとうとしかけた途端に、俄かにどっと関の声を挙げられたので、びっくりして跳ね起きたが、夜中の事で、暗さは暗し、ただわあゝとあわてて騒いで、西に東に駆けずり回った。弓を取る者は矢を取らず、矢を取るものは弓を忘れ、鎧を着て胃を着ず、太刀1本に2人も3人も取りついたり、弓一張りに4,5人もつかみついたりする。馬には逆に乗って後ろに走らせ、或いは薙刀を逆さに突いて、自ら足を突切って立ち上がらない者もあるという風だから、踏み殺され、蹴殺される者も頗る多い。勿論、戦などは思いも寄らず、どちらに逃げようかとばかり焦ったので、主人の馬であろうが、親の鎧であろうが、手当たり次第に乗ったり着たりして、あちらこちらと馳せちがった。

しかし西へ逃げようとするれば、源氏が法螺や太鼓を轟かせて、10,000余騎で押し寄せる。東の正面からは、角に松明をつけた牛を先に追いのぼらせながら、何万騎とも知れない敵が、あとからあとから押し寄せる。北は岩石が高くして上ることが出来ない。南は十余丈(30数m)もある深い谷で、下る道はない。

どうしようもなかったから、ただうろろうろたえ騒いでいるうちに、誰がいうともなく、「南の谷に向って落とせ」と大声で叫んだ。先づ一隊が、さっと俱利伽羅の谷に落とすと、咄嗟の時ゆえ考える 遑もなく、平家の軍勢はその後につづいて続々と落ちた。先に落ちた者が引き返して来ないから、この谷底には好い逃げ道があるのであるであろうと思ったのです。親も子も、主人も家来もつづいて落ちて、馬には人が、人には馬が、上へ上へと重なったので、ついには18,000余騎の平家の兵で、10余丈の俱利伽羅の谷を埋めてしまいました。

たまたま谷を逃れた者は源氏の手にかかって討たれた。又、生け捕りになった者も多かったが、その中に、かのひうち 燧ヶ城で裏切りをした平泉寺のへいせんじ 長ちょう 吏り 齊さい 明めいがいました。義仲は、「その坊主は余りにも憎い、先づ斬れ」と斬らせてしまった。総大将のこれもり 維盛は、不思議にも命を拾って、僅かの将士と共に加賀の国に引退いた。70,000余騎の内僅かに2,000余騎が遁れたばかりでしたというので、その負け方がいかにひどかったかがわかります。

しかし一方、志雄山の方はどうでした？ 義仲は行家の軍の様子を心配して、12日の朝が明けると、20,000余騎を率いて急いでこれを助けに行った。果たして行家は負けそうになっていたところでした。平家の方では、となみ 蠣波山の本軍が全く敗れて、義仲がこちらに向ってやって来ると聞くと、俄かに勢いを失くして、我先にと、これも加賀に引き返しました。

さて平家は、となみ 蠣波山で負けてからは、ただ逃げるばかりでした。そこに、ここにと陣は張っても、源氏が押し寄せたと聞くと、忽ち逃げた。まるで秋の木の葉が風に吹き飛ばされるさまにも似ていた。

さいとうさねもり 斉藤実盛

この時、加賀のしのはら 篠原という処で、落ちて行く平家の軍の中から、さいとうさねもり 斉藤実盛が唯一騎で引き返して、奮戦して、ついに討ち死にした話の一つの美談として伝えられています。さねもり 実盛は28-9年前に、2才のよしなか 義仲を幾日か養った後に、木曾のなかはらかねとお 中原兼遠の許に送り届けた者ですが、今はもう年も73才になっていた。どうせ長くはない命だから、どこで死ぬのも同じであると、深く思い切って、ただ1人で引返して、じゅうおうむじん 縦横無尽に戦った。

その武者振りのいかにも立派なのを見て、源氏の軍からてづかのたろうみつもり 手塚太郎光盛という者が、さねもり 実盛に目をつけて進んでいく。さねもり 実盛もまた手塚に目をつけて進んで来る。手塚は近寄って、「ただ1騎、踏止まって軍をなさるのは感服だ、名乗れ。かく申すは信濃の国の住人手塚太郎光盛」と名乗りを挙げた。実盛は、「さては互いに好い敵だ。但し、思う仔細があれば、名乗ることは自分はしまい。ただ首を取って大将の御目にかけよ。木曾殿はご存知の筈だ。いざ寄れ、組もう」と弓をば捨てて直ぐに近くに寄る。

手塚の家来が主人に組ませまいと間に入って押し隔てると、さねもり 実盛はその家来の背中を掴んで、馬から引き落として、自分の馬の腹に引き付けて提げて行く。足は地から一尺ばかりも上がっていた。手塚はこれを見て、家来を討たせまいと馳せ並んで、さねもり 実盛の鎧の袖を掴むと、「えい」と力を籠めて自分が先に馬から下に落ちた。さねもり 実盛は2人の敵を相手にしようとしていたので、3人が組み合って馬から下に落ちた。さねもり 実盛は手塚の家来を押さえて、刀を抜いて首を斬る。手塚はその間に、さねもり 実盛が鎧の草摺を上げて、柄も拳も透れと刺して、弱る所を組んで伏せて、ついにその首を取った。

手塚は敵の首を家来に持たせて、よしなか 義仲の前に行って、
「みつもり 光盛こそ不思議な敵の首を取りました。名乗れと申せば、思う仔細があるから名乗るまい、木曾殿はご存知の筈だと申して名乗りません。侍かと思えば、さむらい 侍かと思えば、にしき 錦の直垂を着ております、大将かと思えば、つ

第16話 源氏の北国進出

づく家来がおりません。若い者かと思えば、顔には皺しわが寄よっております。年寄りかと思えば髪かみも鬚ひげも黒くろいのです。声は阪東声でありました」といふと、義仲よしなかは暫しばくその首を眺めていたが、

「ああ、それは武蔵の齊藤実盛さいとうさねもりではないか。しかし、義仲よしなかが幼目に見た時にも白髪おきなめが混じって生えていたから、今はすっかり白髪しらがになっていそうなのに、髪はや鬚まの黒いのはどうしたのだろう。顔おの老いようはそうだが不思議である。樋口ひぐちは古い友達だから知っていよう。呼べ」

とて召すと、兼光かねみつは一目見て、はらはらと涙を流して、「ああ可哀想に実盛さねもりです」といふ。どうして髪かみや鬚ひげが黒いのかと訊くと、

「実盛さねもりが日頃申しますに、年を取ってから戦場に向う時には髪かみに墨すみを塗ろうと思う。その故は、合戦でない時でも、若い者は白髪あなどを見て侮まる心がある。況して戦場では、進むにも、退くにも、年寄としよりが年寄がと誇りたがるものだからと申して居ました。いった通りに墨すみを塗ったのです。洗あらって見ましょう」

と言って、水を取り寄せて、兼光かねみつが手づからこれを洗うと、果たして白髪しらがになった。

義仲よしなかは昔の事を思い返して、木曾へ送ってくれたのは偏ひとえに実盛さねもりの恩おんである。その上、たとえ日は僅かであったにしても、実盛さねもりは義仲よしなかの養やしない親おやであったのですから、この恩は決して忘れられない。この首えこうはよくよく回向をするようにといて、さめざめと泣いたので、将士も共に袖そでを絞しぼったという事であります。

(第16話 源氏の北国進出 終わり。 次は前頁に戻り、 第17話 平家の都落ち へ)